

目次

序 章

第一節 本書のねらい

- 一 上海事変の概要と近現代史における地位
- 二 上海事変の先行研究
- 三 問題認識と研究テーマ

第二節 本書の特色

第一章 上海事変前の上海共同租界と中国

——共同租界の安全保障——

はじめに

第一節 上海共同租界の起源と日本の参入

一	上海共同租界	21
二	上海の行政	23
三	共同租界の防衛と日本海軍の警備担当区域	23
(一)	共同租界の防衛の経緯と上海の駐兵権	23
(二)	租界延長道路(越界道路、エキステンション)	25
第二節	工部局と租界の安全保障	27
一	「上海租界協同防備計画草案」の作成の経緯と意義	27
二	「上海租界協同防備計画草案」と日本海軍陸戦隊の異議	29
第二章	上海事変前史	33
	——日中対立要因と日本政府・陸海軍の満州事変対処——	33
第一節	謀略の存在及び事態の展開が意味するジレンマ	34
第二節	日本政府の対中国政策及び中国の政情と排日運動	35
一	満州事変前の日中間の対立	35
(一)	満州の權益をめぐり動揺する日本政府の対中国政策	35
(二)	中国政府の北伐後の政情及び排外運動の淵源、性格、教育	37
二	満州事変以後に激化した日中対立	39
(一)	満州事変以後の日本政府の対中国政策	39
(二)	満州事変以後の中国の政情と内政・外交の構造	41

(三)	上海の排日運動の変化と日中両国に与えた二つの影響	43
第三章	日本陸海軍の中国との係わりと海軍の質的变化	45
一	満州事変前の日本海軍の中国警備任務の考え方	45
二	満州事変以後の対応措置をめぐる陸海軍間の不協和音	48
(一)	満州事変勃発翌日の陸海軍の対応処置	48
(二)	事件当初に示した海軍の陸軍に対する姿勢	49
(三)	海軍に対する陸軍の憤懣	50
(四)	陸軍を制動できない海軍の対応	53
(五)	満州事変の処理の過程で変質を始めた海軍の体質	54
第四節	満州事変をめぐる英国、米国、ソ連の内政と外交	56
第三章	上海事変前の上海における日中対決	63
—	武力衝突前日迄の危機と日中間の応酬	63
第一節	上海総領事及び第一遣外艦隊司令官による事件抑止と対処の考え方	64
一	第一遣外艦隊と総領事館との対立と協調	64
二	上海事変の導火線——「不敬記事掲載事件」から「日蓮宗僧侶殺害事件」へ	67
(一)	満州事変以降に発生した諸事件と邦人の居留民大会	67
(二)	「不敬記事掲載事件」	67
(三)	「日蓮宗僧侶殺害事件」の発生と日中の応酬	68

	(四) 四項目要求に関し中国側に回答期限(タイムリミット)提示の内情……………	72
	第二節 中国軍(第十九路軍)の淞滬(呉淞、上海)配備と対日姿勢……………	77
	一 中国政局の内紛と第十九路軍の淞滬(呉淞、上海)配備……………	77
	二 日中武力衝突直前の蔣介石と第十九路軍との確執……………	79
	三 第十九路軍の来歴……………	81
	四 敵対準備する第十九路軍……………	83
	第三節 共同租界の防備上の問題……………	84
	一 日本側の防備区域に対する工部局の対応の失態……………	84
	二 塩沢司令官が要望した上海共同租界の戒厳……………	85
	第四節 海軍中央の危機対処の指導……………	87
	一 百武軍令部次長の上海現地報告電報と左近司海軍次官の申進……………	87
	二 塩沢司令官の平時封鎖案と海軍中央の拒否……………	88
	三 上海情勢の緊迫と海軍中央の対応……………	90
	第四章 「第Ⅰ期…事変勃発期」における軍事と外交……………	95
	——上海事変の勃発の構造(侵略と誤認された背景と理由)——……………	95
	第一節 第一遣外艦隊の兵力と塩沢司令官の兵力行使の方針……………	96

第二節 中国側の全項目容認回答の提示と日本側の対応	99
一 呉市長の全面容認回答をめぐる日中軍事衝突の経緯と日本側の内在的問題	99
二 警戒配備に関する三つの疑問とその原因	103
（一）午前零時の警戒配備発令の背景	103
（二）司令官声明の可否の問題	103
（三）声明到達遅れの意義と中国に与えた影響（塩沢司令官が上海を侵略したと見られた原因）	105
三 上海陸戦隊配備の決断を左右した塩沢司令官の舞台裏	106
（一）塩沢司令官の言動に対する列国の批判	106
（二）塩沢司令官の警戒配備を促進・加速させた日本側の内情	108
第三節 「第Ⅰ期・事变勃発期」における閩北戦	111
一 上海海軍陸戦隊の戦闘	111
（一）上海海軍陸戦隊の警備区域と戦闘の全体像	111
（二）「第Ⅰ期・事变勃発期」における日本海軍陸戦隊の閩北戦	112
二 第十九路軍の戦闘	115
（一）事变勃発当日（一月二十八日）の第十九路軍の動き	115
（二）第十九路軍の戦闘の実態	117
第四節 中国軍と南京政府の対応	119
一 上海事变勃発と蔣・汪合作政権の「一面抵抗、一面交渉」	119
（一）二国間交渉拒否から「一面抵抗、一面交渉」への方針変更の背景	119

(一) 軍事衝突直後の南京政府の三つの対応	120
二 南京政府と第十九路軍の確執	123
三 第五軍の上海戦参戦の背景	124
(一) 第五軍の編成と上海事変の勃発への対応	124
(二) 上海事変中の二月五日ハルビン占領の波紋	126
(三) 第十九路軍、第五軍の抗日参戦意欲の理由	126
四 上海における中国共産党の戦略と影響	128
第五節 不成功に終わった最初の停戦交渉	131
一 重光駐華公使の事変勃発の觀察と陸軍派遣依頼	131
二 村井総領事と塩沢司令官の第一回停戦交渉	132
三 日本政府の「一月二十九日帝國政府声明(一次)」	136
第六節 陸軍派遣の要請と日本政府、海陸軍の対応	138
一 陸軍派遣の進言と陸海軍中央部	138
二 陸軍派遣の閣議決定	142
三 派遣兵力量に関する意見の不一致と合意の形成	144
四 派遣部隊の規模・編成と輸送	145
五 第三艦隊司令長官野村吉三郎海軍中将の親補と艦隊の編成	146
六 第三艦隊の編成と陸軍出兵の決定の意味するもの	149
(一) 塩沢司令官の排日根絶に示した姿勢に対する国内外の評価	149
(二) 第三艦隊の編成と野村の起用の意義	149

第七節 国際連盟の上海事変勃発に係わる対応	151
一 中国理事による国際連盟規約第十条、第十五条適用の提訴	152
二 二月二日の公開理事会	155
第八節 英米等の事変勃発に係わる事実認識と対日態度	157
一 英米等の事実認識に見る三つの特徴	157
二 英米の上海に対する部隊急派（プレゼンス）	164
第九節 英米等主要列国の対日同文通牒と第二回停戦交渉	165
第五章 「第Ⅱ期…事変初期」における軍事と外交	177
——第三艦隊及び陸軍派遣による橋頭堡の設定と停戦の動き——	
第一節 「大海令」の発令と先遣混成旅団派遣決定の内情	180
第二節 呉淞砲台の攻略作戦の決定と撤回	182
一 呉淞砲台攻略問題の発生	182
二 呉淞砲台が砲撃した背景と同砲台攻略作戦決定の経緯	183
三 呉淞砲台占領作戦の撤回問題	185
第三節 呉淞砲台の攻略問題をめぐる海軍の内在的問題	188

第四節 第三艦隊及び第九師団の作戰構想と国際関係への姿勢	191
一 第三艦隊司令長官野村吉三郎海軍中將の作戰に対する腹案	191
(一) 戦局判断と各国海軍指揮官との調整	191
(二) 上申した平時封鎖案の結末と制空権の確保	194
二 閑院宮參謀総長及び荒木陸軍大臣が植田第九師団長に与えた指示	196
三 第九師団長が指揮権掌握に際して行った四つの措置	197
四 第九師団主力の海上輸送及び国際関係を阻害した上海上陸	200
第五節 閩北及び呉淞鎮方面の戦闘から陸海軍協同作戰の態勢へ	203
一 停戦期間中の閩北戦闘の実態と協定破棄後の日本海軍陸戦隊の総攻撃	203
二 陸海軍協同作戰の徹底の背景と第一次総攻撃の発想	204
三 第九師団隷下の兵力編成と兵力装備	205
第六節 中国軍の作戰・戦闘の内情と蒋介石の対応	209
一 中国側の戦闘経緯と蒋介石のジレンマ	209
二 蒋介石直系軍の第五軍の参戦と第十九路軍の対日迎撃配備	214
三 長期的な戦争観と緊迫した戦争観との対立とその意義	215
四 蒋介石の増兵の体制を目指した「全国防衛計画」	216
五 中国海軍の避戦の実相と背景	217
六 中国空軍の兵力と避戦への行動	220

第七節	日本軍の最後通牒と日中両軍の対峙	223
第八節	「第Ⅱ期…事変中期」の外交	226
	——第三回、第四回の停戦交渉と事変收拾の動き——	
一	上海現地における停戦交渉の継続	226
(一)	三回目の停戦交渉（ケリー司令長官と野村司令長官の会見）	226
(二)	第四回目の交渉（英ランプトン公使の斡旋）から日本軍の第一次総攻撃へ	229
二	国際連盟規約第十五条の適用をめぐるジュネーブの日本代表と国際連盟要路との折衝	231
三	上海調査委員会の第一次・第二次報告と二月九日以降の国際連盟理事会	233
四	日本軍上陸に対する「連盟十二国理事の対日勧告（アピール）」と日本の反駁	236
五	二月十九日公開理事会と事変初期の日本外交の特色	238
第六章	「第Ⅲ期…事変中期」の陸海軍協同作戦と停戦への動き	249
	——日本軍の第一次・第二次総攻撃の苦戦と外交の硬化——	
第一節	第一次総攻撃（二月二十日戦闘開始）	251
一	日中両軍の会戦準備	251
二	第一次総攻撃	252
(一)	第一次総攻撃の諸戦闘及び苦戦の実相	252
(二)	戦闘における飛行機運用と弾薬使用等	255

第二節	第二次陸軍派遣(第十一・第十四師団)の決定とその背景	257
第三節	第二次総攻撃(二月二十五日戦闘開始)	259
第四節	第一次・第二次総攻撃における日本軍の苦戦原因並びに中国軍の対日抗戦の強弱	261
第五節	第三次総攻撃(三月一日攻撃開始)の決定の経緯	265
第六節	第二次派遣が決定した陸軍部隊(第十一師団)の規模内容と輸送	266
第七節	第十一師団の上陸問題と昭和天皇が軍司令官に与えた叡旨	270
一	第十一師団の上陸地点の研究	270
二	昭和天皇が白川軍司令官に与えた叡旨	272
三	第十一師団の上陸地点・七了口の決定	273
第八節	第三次総攻撃に関する「上海派遣軍命令(上陸作戦及び中国陣地攻略作戦)」	275
第九節	「第Ⅲ期…事変中期」の外交(日本軍の第一次・第二次攻撃の期間)	277
一	第一次総攻撃前の国際連盟と重光公使の請訓	278
二	第一次総攻撃後の仏国新聞記者らの国際連盟脱退愆瀆の意見	279
三	第三次総攻撃前の米英の対日態度と日本の対応	280

(一)	米国「上院外交委員長ボラー宛ての公開状」の思想的背景、意義と日本との応酬	281
(二)	英国の対日警告と日本の対応	284
(ア)	英国外務省の対日姿勢と日本外務省の対応	284
(イ)	在外公館（在英・在仏日本大使）から芳沢外相に宛てた意見具申	287
(三)	二月二十八日「ケント」号上の非公式会談の開催に至る英国側の舞台裏	290
(四)	第五回停戦交渉（二月二十八日「ケント」号上の非公式会談）	292
(ア)	二十八日非公式会談の背景と結果	292
(イ)	中国側からの停戦に関する五項目の提議	295
(ウ)	中国側の五項目の提議をめぐり、陸軍を激昂させた松岡洋右の会談姿勢	296
四	二月二十九日の理事会決議とその意義	297
	第七章 「第IV期…事变後期」の軍事と外交	
	——第三次総攻撃から停戦協定の成立へ——	307
第一節	本章における四つの論点	308
第二節	日本軍の第三次総攻撃	309
一	白川軍司令官の上海到着と第三次総攻撃の実相	309
(一)	第九師団主力の第三次総攻撃の作戦態勢と戦闘	309
(二)	第十一師団の七了口の上陸及び西涇營、劉河鎮の占領と追撃	310
二	過去三回の総攻撃に策応した日本軍の主要な作戦	313
(一)	閘北対峙戦、追撃戦	313

	(一)	海軍飛行隊の作戦と制空権確保	315
	(三)	呉淞砲台の攻略	316
	(四)	便衣隊の掃討と自警団	317
	第三節	全戦局を通じて観察された中国軍の強靱な抵抗及び総退却の背景と理由	321
	一	中国軍が示した強靱な抵抗力の背景と理由	321
	二	中国軍の撤退の背景、実相とその理由	323
	第四節	戦闘中止声明の発出と日本側の事変指導の問題	327
	第五節	ジュネーブにおける英サイモン外相の対日避戦要請(第三次総攻撃中止の要請)の挫折	331
	第六節	三月三日の国際連盟総会に露呈した日本側のジレンマと外交破綻の序曲	334
	第七節	三月四日の総会決議と停戦の実動を阻害する二つの要因	336
	一	総会において露呈した日本側の二つの阻害要因	336
	二	三月四日決議後の第十四師団上陸とジュネーブにおける対日印象の悪化	340
	三	局面打開を図った英サイモン外相の国際連盟総会一般原則	341
	四	三月十一日の国際連盟総会決議と日本軍の撤退をめぐる日本側の対応	343
	第八節	三月四日の総会決議に基づく上海現地の停戦協議の開始	349
	一	停戦協議開始に関する日本側の基本姿勢	349

一	英ランプソン公使の斡旋による三月十四日「円卓会議ニ関スル草案」	351
第九節	満州国家成立問題をめぐる主要国との応酬	354
第十節	三月十四日「円卓会議ニ関スル草案」をめぐる日本陸軍の交渉姿勢と展開	359
一	「円卓会議ニ関スル草案」に対し日本側が示した交渉姿勢の二つの変化	359
二	三月十九日(第二三回予備会談)と二十一日第四回予備会談の基本協定(三月二十四日の停戦本会議の停戦協定案)	363
第十一節	ジュネーブの「十九人委員会」の任務・権限と上海の第一回停戦本会議(三月二十三日)(日本側の「セパレート・ノート」の譲歩)	370
一	「セパレート・ノート」と国際連盟規約第十五条適用除外がもたらす矛盾	370
二	ジュネーブの「十九人委員会」の第一回会議(三月十七日)と日本の満州問題の登場	374
第十二節	上海における停戦本会議(三月中の第九回迄)と芳沢外相の「対連盟方針」	378
一	上海の第一回停戦本会議の叩き台となった停戦協定日本案	378
二	停戦本会議における軍事小委員会の設置と日本側の論理の内情	379
三	芳沢外相の「対連盟総会方針」	382
第十三節	停戦会議(四月から協定成立迄)	386
一	四月四日の英ランプソン公使の新たな調整案	386
二	上海現地の三つの重要問題と四月十一日の会議停頓迄の交渉	390
(一)	日本軍の撤収地域問題	390

(一) 日本軍の撤収時期問題	390
(二) 中国軍の駐兵制限区域問題	393
第十四節 芳沢外相の「対連盟方針」に対する主要国の反応	394
一 英米及びドラモンド事務総長の反応	394
二 日本在外公館の意見	396
三 日本の国際連盟脱退論とその反響	398
第十五節 ジュネーブの「十九人委員会」と上海の停戦本会議の再開と協定成立	400
一 国際連盟に対する中国側の対応と「十九人委員会」の開催	400
二 「十九人委員会」の決議に対する日本側の解釈と対応	402
三 最終的な停戦協定の成立	407
第八章 日本陸海軍の撤収と日中双方の損害	431
第一節 海軍派遣部隊の帰還	432
第二節 陸軍の撤収	434
一 第一次及び第二次帰還	434
二 第十四師団の満州転用	435
三 白川軍司令官の負傷と第三次帰還の決定の経緯	435

四	第三次帰還に伴う撤収準備	436
五	第三次帰還と白川軍司令官の死去	437
第三節	上海事変における日中双方の被害	438
一	日中両軍の損害	438
二	上海の災禍	440
第九章	事変の謀略に関する考察	443
	——その発想と限界——	
第一節	事変に係わる謀略の背景	446
一	満州事変の推進に自信を得た関東軍	446
二	田中隆吉の供述による事変勃発の画策	447
第二節	事変の画策を裏付ける史料とその意味	452
第三節	陸海軍の田中隆吉少佐の謀略に対する姿勢	455
第四節	事変勃発と謀略の構図	457

第十章 上海事変が日本海軍に与えた影響

——海軍軍令部の権限強化から海軍の暴走へ——

第一節 「支那事変軍事調査委員会」の設置と機能

- 一 「支那事変軍事調査委員会」の位置付けとメンバー……………466
- 二 「支那事変軍事調査委員会」の検討結果の推察とその結果の意味するもの……………467

第二節 第三艦隊の常設及び上海海軍特別陸戦隊の設置

- 一 第三艦隊の常設……………469
- 二 上海海軍特別陸戦隊の設置……………470

第三節 海軍軍令部の権限強化

- 一 軍令部機能強化の実態……………472
 - (一) 「戦時大本営編制」と「戦時大本営勤務令」及び「軍令部編制」の改定……………473
 - (二) 「軍令部条例」及び「省部互渉規程」の改定……………474
- 二 「支那事変軍事調査委員会」の検討結果の教訓と軍令部機能強化の連関……………474
 - (一) 「軍令部条例」の「用兵ノ事ヲ伝達」の改定……………474
 - (二) 軍令部四班十一課への拡大改定並びに戦争指導・作戦指導……………475

第四節 上海事変が促した海軍の強硬化と影響

- 一 条約派人事の排斥とその意味……………477

二	国際連盟脱退後の国策の設定と海軍の暴走の始まり	480
	第十一章 上海事変による外交破綻への序曲	
	——国際連盟脱退への加速要因と「リットン報告書」の「第五章 上海」——	485
	第一節 外交破綻の序曲に繋がった上海事変の外交事案とその意義	487
一	上海事変勃発直前の日本側の軍事と外交部門の対応の齟齬	487
二	権益擁護（居留邦人保護等）のための武力発動により後退した外交	488
三	上海事変勃発によって新たに提訴された国際連盟規約第十条、第十五条	490
四	「連盟十二国理事の対日勧告（アピール）」と日本政府の反発回答	491
五	米国国務長官が発したボラー宛ての書簡が意味する日米のパーセプション・ギャップ	493
六	第三次総攻撃を控えた「ケント」号上の非公式会談	494
七	円卓会議設置案の流産の因果関係	495
八	中国側から要請された事変審議の総会格上げと審議を紛糾させた複数の事案	496
	第二節 リットン調査団と「報告書」の「第五章 上海」	499
一	リットン調査団と調査行動の経過	499
二	中国側の抵抗が以後に及ぼした影響	501
	第三節 停戦協定の成立迄の調査活動において、後の「報告書」の起草に影響を与えた主要事案	502

終章

第一節 上海事変の軍事的側面	515
一 上海事変の遠因・近因・引き金論と謀略	515
二 日本の危機管理体制の失態	516
三 日本自らの意思で収拾した上海事変の明暗	516
四 権益擁護のための軍事力行使の意義と排日運動に対する日本の不満	517
五 中国側が示した愛国心と武力抵抗戦に対する自信	518
六 海軍の暴走を触発した上海事変と意義（海軍任務の防衛から国策擁護への転換）	519
第二節 上海事変の外交的側面（外交の破綻の序曲）	520
一 外交の成果と負の遺産	520
二 守ろうとした国策（満州権益の維持拡大と満州国承認問題）の性格と運営	521
第三節 総括	524
一 国策が内蔵していた陸軍の下克上謀略を生む因果関係	524
二 下克上の謀略が意味する無名の師	524
三 「無名の師」と「国家の正当防衛」の分岐点	525
四 日米衝突コースを招来した国策とその自覚の問題	526

謝辭……………530

索引……………550

人名索引……………550

事項索引……………544